

看護情報学 ディスカッション記録

2009年6月18日

テーマ：大学生と薬物乱用～大麻について～

発表者：砂川昌子

(記録：田代)

<内容>

先生：大学では教室以外は何もやっていないのか？

砂川：リーフレットを配ったり、専門家による講演を年に1回したりしている程度であるが、聖路加では何かしているのか？

先生：今年からやらなければならない、取り組むべき課題として取り上げただけで具体的には決まっていない。

砂川：危ない所でアルバイトをしていたりして、駄目だといっても大学生は納得しない。

先生：危ない所とは？

砂川：キャバクラとか、デリヘルとか

砂川：相談があった時の学校としての対応をどうしたらいいか、学生を守るという考えもあり、話し合っているが難しい。

亀井：薬物については特にやっていない。たばこに対しては行っている。保健委員会ではやっているが、教員からのアプローチはあまりしていない。

砂川：保健所での相談などはどうか？

嶋津：家族からの相談はあったりする。アディクション関係の講演会はある。回復した当事者の体験談とかのほうが身近にせまってくるのかなと思う。薬剤師のほうが小学校に出かけて行き薬物乱用の話をしたり、サッカーの試合等でダメ絶対ダメキャンペーンをしたりする。自分に身近なことであると思ってもらうことが難しい。身近な世代の話のほうが効果があるのかなと思う。

先生：寝た子を起こすという問題があるが、

砂川：変に大々的にやろうとすると嫌がる先生たちがいる。

先生：(海外で)どこまで研究が進んでいるかわからないが、子供のころからの健康教育が日本にそのまま適応できるかどうかは疑問なところもある。日本では最終的に本人に情報を与えて判断を任せるといった文化ではないので。潜在的な問題、触れないことで抑えられていることも考えられる。性教育でも寝た子を起こすなどというひともいる。海外でこうだからということは通用しないと思う。関わった人が知らなかったということもある。

砂川：女子学生など知らなかったでは済まない問題もある。情報の取捨選択が必要という教育も必要と思う。

嶋津：海外でサーフィンがうまくなるという認識で1年(大麻を)使用して帰国したら依

存症になったという例もある。情報は伝えたい。日本だけが厳しいという見解についてはどうなんだろうか。

砂川：実は合法であるという国はない。単にだめというだけでなく、教育をしているという感じがした。大麻はがんにも使用しているので使い方次第というところもある。

先生：コーヒーショップで、オランダでは普通に吸えるらしい。地域、文化にあったやり方がたぶんあるんだろう。ちょっとでもいけないということにすれば徹底的にやる必要があるが、それも難しい。

砂川：日本では、いいのか悪いのか判断できないひとがいる

先生：どっちが被害者を生んでいるのかということを見ると、情報を与えて制限したなかでやってもらおうと、被害者というのはいないのかもしれない。知らないでやったら、誰が悪いのか、

自分を守る方法を教えていなかったら社会として責任があるのではないか。被害者を生まないようにするには、もっと徹底的にやる必要がある。冤罪でもそういえるのではないか、冤罪の被害者がまだ少ないので、それを出してもいいのでは、という考えもあるのではないか。情報という視点からすると、冤罪は情報操作をしている。絶対正しいという考え方が通用している。問題なのは、行き過ぎた性教育をやっている教師、学校があつたりするが（何のエビデンスもなく）、介入するなら、一定のエビデンスが必要。情報の活用の仕方を教えないと教える側の自己満足になってしまう。

砂川：情報の出所が不明な情報もあった。

亀井：インターネットで購入できるらしいが、追跡は難しいのか、現行犯でないと、ということになる。都会だからというか、地域性もあると思う。

先生：支持派のほうが多い？

砂川：支持派のサイトが多い気がした。

先生：実際、海外にいくと、やっているひとがいるし、

亀井：栽培法など公開しているが、こういうのは捕まらないのか

砂川：買ったものは純度がわからないので、栽培したほうが純度が高いものが手に入るので栽培するひとが多いということになっている。

先生：ある先生は、作用を考えると、酒でいいじゃないかともいっているが、（大麻を）経験したものからいうと、あんな気持ちのいい経験はやってみないと、という話になる。だめといわれることをしたい者にとっては、何を言われても効果がないという面も。